# 浄青神奈川

大本山光明寺御法主戸松啓真台下御染筆

神奈川浄青機関紙
第 22 号
発行日 1995年6月1日
発行人 國松俊康


## 月回向（ツキエコウ）とお寺の経済

神奈川教区教化団団長 清水巖矩

五時に鐘を撞き、八時には月回向に出掛けるのが私の日課です。一日四、五軒、一ケ月に百三十軒くらいですが、お葬式や法事の多い月は廻れない日もでてきます。皆さん待っていて下さるので、なるべく日程をくずさないよう心掛けています。このところ教務所に出仕する為、ちょっと疎かになって申し訳なく思っています。それでも「大変だな」「よくやるね」と冷やかされては得意顔をしています。

朝五時の鐘撞きは傍目には辛いことのように写るかも知れませんが、四十年も続けているので、さほど苦痛ではありません。

月詣りも大変な仕事ではありますが、お布施は戴くし、お檀家との対話もあり、お茶など接待されて楽しいお勤めです。

月一回は必ず訪問するので親戚以上の付き合いとなり一族がお檀家だと、私が情報連絡の〝使者〟として重宝がられます。ご先祖の祭祀をめぐっての調停役にに立つこともあります。勿論、法事の相談や、寺からのお願いごとを伝えるのにもよい機会です。

然し何といってもお寺の経済の安定に寄与することが月回向の一番有難いところです。私の地域では、宗派を問わず月回向をしています。汗して歩き、お檀家と膝をつき合わせて語り合うことで寺院経済への自信も生まれてきます。「教化活動」と呼ぶこともできましょうが、そんな片意地張ったことではありません。

昔、商店に〝ご用聞き〟の制度がありました。朝注文をとって後で配達するサービスですが、月回向もどこかそれに似ています。

先の阪神大震災では、浄青の方々が各地で托鉢し義援金を募られました。托鉢行は三宝を敬う一般の人々からも素直に歓迎されて、短時間にかなりの浄財が投ぜられたときいています。

私も地区仏教会の「歳末助け合い」托鉢行を続けて十年以上になります。十人ほどの坊さん仲間と暮の街を半日ほど歩くのですが、日頃顔を売っている場所なのでパフォーマンスしているようで気恥ずかしさがあります。それから見ると浄青の方々の純粋な奉仕行には敬服します。

月回向も托鉢もお寺から外にでての勤行です。そして戴くのは信者の浄財です。

あるとき「坊さん達はよい車に乗っているね。」と皮肉られたことがあります。〝坊主まるもうけ〟といいたかったのでしょう。

私たちの生活の場は、税制上の優遇措置を受けている〝宗教法人〟と〝僧職〟というサラリーマン的立場の両面がありますが、法務以外なら好きな暮らしを送っても構わないとはいえません。

浄財とはそれを求める側も与える側も、ともに〝清らかさ〟から発したものです。それが職業人としての僧侶の手に渡ったあとに、果して、与えた側の志に応えているでしょうか。僧侶たるものは、自省することを忘れてはいけないと思います。宗教法人の責任者は常に公人としての世間の目に晒されているのです。

托鉢乞食行を通しての修行生活に専念することは僧侶の基本姿勢でしょうが、生活の多様化した都会に生きる僧侶たちにとって、それを行うことは容易ではありません。

一般人が私たちを見る目とそれに対処する私たちの心の在り方には、確かに二律背反的思いがないとはいえません。そんな自己矛盾をどう解決したらよいのか、ご教示ください。

### ●総会報告

平成七年四月二十四日大本山光明寺
議長 京浜組理事 宮林雄彦氏
平成六年度会計決算報告並事業報告
平成七年度神浄青会費値上げの件
平成七年度会計予算並事業計画
以上が承認された事を報告致します。

# 「自策自勵（ジサクジレイ）の場として」

第十代神浄青会長　國松俊康

唐突ですが、最近私は良く同じ質問をされます。それは「オタクは、狙撃された警察庁の國松長官とは親戚ですか。」と言うものです。お答えしましょう。全く関係有りません。

何とも騒々しいご時世です。こうした状況下、私共の執行部は、関係各位の暖かいご支援のもと、何とか無事一年を乗り切り、二年目を迎えることが出来ました。

昨年度はレギュラーの事業の他、当会の担当で関ブロ大会の開催、思いも依らなかったあの阪神大震災への対応等々、何かと忙しい年でした。

特に阪神大震災に関しては、何分、我々が未だかって経験したことのない大災害であり、当初は当会として、どのように対応すればよいのか、大変当惑しましたが、会員、OB諸師への義援金の依頼、救援托鉢、救援ボランティア等の活動を通して甚だささやかではありますが、復興へ向けての救援活動の一端を担わせて頂きました。関係各位には、この一連の救援活動に際し、物心両面に渡り、多大なご協力を賜り誠に有り難うございました。この紙面を借りて、改めまして御礼申し上げます。

また、もう一点、会員各位には御礼を申し上げなければなりません。周知の様に本年度より関ブロ会費が一人に付き五百円の値上げとなりました。と同時に当会の会計状態も決して余裕の有るものとは申せません。このような現状を踏まえ、本年度より当会会費を千円値上げして頂くことを本年度総会に於いてご審議願いましたところ、有り難くもご承認を得ることが出来ました。会員各位にはご負担増となり甚だ恐縮に存じますが、何卒お察しの上、ご了承の程宜しくお願い申しあげます。

さて本年度は、関ブロソフトボール大会、全浄代表者研修会、関ブロ三大本山別時念仏会を神浄青の担当で開催しなければならない他、明春には海外研修なども計画しており、何ともシンドイ一年となりそうです。会長として運が良いのか悪いのか（イイワケガナイ！）は判りませんが、いづれにしても皆様のお力添えなくして、この難局を乗り切ることは到底不可能です。どうか本年度も会員各位の諸事業への積極的なご参加、ご協力を重ねてお願い申しあげます。

ところで、この原稿を書くに当たり、何か良いネタはないものかと、昨年刊行された「神浄青二十周年記念誌」（これはN編集長の意欲作であり、且つ膨大な費用が掛かっています。決して粗末にせず、必ず一度は目を通しましょう）をパラパラと繙（ひもと）いていると、前光明寺御法主故藤吉慈海大僧正台下が十年程前の浄青神奈川に寄せられた「浄青に期待する」と言う一文が目に止まりました。この中で台下は善導大師の「日没無常偈」より

各聞教健有力時
自策自勵求常住

の一節を引用され、「何時までも煮えきらないでふらふらするな。若いうちにこそ常住なるもの、つまり永遠なる真理が自分のものとなるまで自策自勵すべきである。」（要旨）と我々青年僧を一喝されています。簡潔な文章ながら、読んでいて思わず居住まいを正したくなるような、いかにも藤吉台下らしい胸のすく薫陶であると思います。同時に私にとっては何とも耳の痛いお言葉です。皆さんはどうでしょう。「自策自勵求常住」していますか。

ここで私ごときが、改めて台下の文章を引用させて頂いたのは、私も含めて多くの青年僧が安易な方向へふらふらと流されているのではないかと思うからです。そして何よりも浄青活動が、あなたの「自策自勵求常住」の場であればと願うからです。

皆さん今一度自己点検をお願いします。そして、思い当たる節があったなら一緒に自策自勵しましょう。

## 平成七年度事業計画

**4月24日**　神浄青定期総会
**5月10日**　第1回理事会
**6月1日**　機関紙発刊
**6月12～13日**　埼玉教区
第23回関ブロ総会
及び研修会
**7月4日**　開山忌前清掃奉仕
**7月4日**　第2回理事会
**7月29～30日**　夏期僧堂手伝い
**8月29～30日**　長崎
第25回全浄中央研修会
**9月上旬**　第3回理事会
**9月12日**　神浄青ソフトボール大会
**10月9日**　十夜前清掃奉仕
**10月9日**　第4回理事会
**10月14日**　十夜法要手伝・十夜街頭伝道
**11月15～16日**　神奈川
第13回関ブロ
ソフトボール大会
**11月29～30日**
第20回全浄代表者研修会
**12月中旬**　第5回理事会
及び神浄青忘年会
**1月25日**　御忌別時念仏会
**2月中旬**　第21回全浄代表者研修会
**2月中旬**　第6回理事会
**2月下旬**　他宗団見学（海外研修）
**3月下旬**　第7回理事会

## 「第一回 神浄青バレーボール大会」?

三浦組　吉水　祥史

神浄青ソフトボール大会が九月三十日に武山球場で行う予定でしたが、前日の雨で使用できなくなり三浦市体育館でバレーボール大会を参加者70数名で開催した。ソフトボールが中止の場合、バレーボールに変更するのは初めてなのでスタッフ一同準備にとまどいながらゲーム内容を考え普通のバレーボールとは違うゴムボールを使いコートも半分の面積で時間制で得点の多いチームを、勝ちとするルールで行った。Aブロック4チーム、Bブロック4チームで総当りで激しい戦いが展開された。最初はボールを追うのが精一杯だったが時間がたつにつれ慣れてくると豪快なスパイクが飛ぶ回転レシーブでボールをひろいブロックで相手のボールを防ぐVリーグ顔負けの試合になり好プレー珍プレーが続出し愉快な大会になったと思う。結果はAブロック1位の小田原組とBブロック1位の鎌倉組で決勝戦となり3点差で小田原組が優勝した。懇親会では各賞の発表があり最優秀賞には年令を感じさせない軽やかな動きでチームを優勝に導いた戸松上人に輝いた。爆笑の懇親会の後翌日の全身筋肉痛を予感しつつ解散した。

## 「阪神大震災」駅前募金

港北組　平元　正法

ご周知の通り、去る一月十七日早朝、神戸地方を中心に戦後最大級の地震が襲い五千人を上回る死者と未曾有の被害を出した。苦薩の道としてとりあえず募金活動をしようという意見でまず連絡をとり合い、参加できるメンバーを確認した。でき得る限り早急にということから、十九、二十日両日、JR新横浜駅前にて、改良服にて常念仏をしながらの募金となった。時間帯をサラリーマン、OLの帰宅する夕刻六時半から八時頃までと設定し、学生、外国人を含む多くの方々から募金を頂いた。気温僅か二度、寒風身にしみる中計十五万円を超える義援金が集まり、「日本赤十字社」を通して被災地へ贈らせて頂いた。尚参加者は八名であった。尚、横浜市と神戸市は姉妹都市関係にあり、とにかく早めに活動したいとの主旨から、港北浄青として行ったことをご理解願いたい。

平成七年二月四日（土）神浄青会員により、鎌倉駅前にて阪神大震災救援募金が行なわれ、233,603円が全浄をとおして被災地へ送られた。

### ◆平成6年度　神浄青事業報告

**4月23日**　花まつり愛のプレゼント
平成6年度神浄青定期総会
関プロ実行委員会
**5月9日**　第1回理事会
**6月7～8日**　第22回関プロ総会並
研修会　神奈川担当
箱根湯本河鹿荘
**6月10日**　「浄青神奈川21号」発行
**7月4日**　開山忌前清掃奉仕
第2回理事会
**7月29～30日**　教区夏期僧堂手伝い
**8月29～30日**　第24回全浄中央
研修会　宇奈月温泉
**9月2日**　第3回理事会
浄青神奈川20周年記念誌発行
**9月30日**　神浄青ソフトボール大会
並懇親会　三浦浄青担当
（雨天の為バレーボール大会）
**10月7日**　十夜前清掃奉仕
第4回理事会
**10月14日**　十夜法要手伝い
十夜街頭伝道（港北、港南）
**11月24～25日**　第12回　関プロ
ソフトボール大会（茨城教区担当）
**12月15日**　第5回理事会
**1月25日**　御忌別時念仏会
**2月4日**　阪神大震災救援托鉢
**2月16日**　第6回理事会
**3月8～10日**　阪神大震災救援
ボランティア
**4月7日**　第7回理事会

# 第22回関ブロ大会報告

実行委員会総務部部長
三浦組　杉浦　定徳

第22回関東ブロック浄土宗青年会総会並びに研修会が、平成6年6月7・8日両日にわたり、箱根湯本のホテル河鹿荘を会場に開催された。

大会テーマは、「安心」―生命の尊さと心の安らぎ―。生命（いのち）を取り巻く問題がいろいろと取り沙汰されている今日にあって、我々浄土宗青年僧侶の責務と共動指針を模索することをテーマとした。

実際の研修では、女優の藤村志保先生、ピースハウスホスピスのチャプレンである斉藤武先生、真言宗豊山派西明寺住職の田中雅博先生をお招きして講演を賜った。以下、その内容を振り返ってみたい。

藤村　志保　先生

藤村先生は、女優であられる事は周知のところであるが、腎臓移植推進運動に誠意参加されており、自らも腎バンクに登録なされている。腎臓移植を受けた人達と臓器を提供した側の家族との出会いを通して、この問題を中心に講演された。

**「出会い」―いのちの尊さ―**

10年前、腎臓移植を受けた人達のソフトボール大会に参加した折、真夏の炎天下にもかかわらず躍動し汗をかくことにこの上無き喜びを感じ、腎臓移植を受けた日を第2の誕生日とする人達と出会い、深い感銘を得た。慢性腎不全の患者は汗をかくことがない。週数回の人工透析を受けなければ生きては行けない。成長期にある小児の場合は身体の発育がそこでストップしてしまうという苦しみを背負っている。現代医学では腎臓移植しか治療法がない。

日本の場合は、健常者（主に親子兄弟といった家族）の片方の腎臓を移植するケースが約8割、残りは死亡した人からの提供である。この比率は欧米と比較すると全く逆である。数的に見ても腎臓バンクの登録数や亡くなった人からの移植手術件数は欧米と比べてまだまだ少ない現状である。

臓器移植という善意による無償の行為が、生命をリレーしうる尊厳的医療行為であると考える。一人でも多くの人々の幸せを願い、生命を存続していく行為が、釈迦の説く慈悲の教えにつながるのではないか。

斉藤武先生は、プロテスタントの牧師であられる。アメリカ留学及びスタンフォード大学病院チャプレン等を経て、現在神奈川県足柄上郡にある財団法人ライフプランニングセンターのピースハウス病院（日本初の独立型ホスピス）チャプレンとして活躍。日本のホスピスカウンセリングの草分的存在である。

斉藤　武　先生

今回は、ホスピスの歴史をふまえ実際の活動を通してホスピスケアにおける宗教家の必要性について講演された。

**「末期患者とその家族のケア」**
**―チャプレンの立場から―**

ホスピスは元来キリスト教の教えの中からうまれたものである。教会において医療行為を施し、また亡くなっていく者をみとっていた。しかし、次第に患者の数に対応しきれない状況となり、経済的に優位にある者が優先的にケアを受けるようになった。このような事は教会に経済的蓄積をうみ、この事態に脅威を感じたローマ法王が教会に対し医療行為の禁止を命じた。これが西暦一六〇〇年頃のことである。その後の医療行為は、はさみと剃刀の扱いにたけた当時の床屋が受け継ぎ、専業化され技術的にもどんどん向上していった。

このような流れの中で、ホスピスが新たに重要視されるようになってきたのは、いかに医学や医療技術が発達しても最後には「死」を迎えなければならないためである。すなわち、身体の痛みよりも心の痛みをどう和らげるかが問題となってきたのである。

「気の毒だ、かわいそうだ、悲しみ、嘆き」といった言葉は、医学の言葉ではなく宗教がかかわってくる

言葉である。ホスピスケアにおける宗教家の役割は、まさにこのような「悲しみ、嘆き」といったような他の学問が持ちえない宗教的なところでかかわっていく事である。

実際のケアに当たっては、対象となる患者やその家族を診断する必要がある。末期患者とその家族は、喪失による心身のさまざまな反応を見せる。すなわち「悲嘆」に陥っているのである。この「悲嘆」については、約100年前にフロイトが研究している。その後は、一九四三年にアメリカの学者リンネマンが、フロイトの研究に手を加える形の論文を発表している他には目新しいものはない。それによれば以下のごとくさまざまな反応が表われるとされている。溜息をつく、面影のみを思う（非現実的になる）、考えがまとまらなくなる、怒りっぽくなる、じっとして動かなくなる、落ち着きなく動き回る、音に敏感になる。更に、不安感、孤独感、疲労感、無力感、解放感、罪悪感といったものを感じるようになる。

このような状態の中で「悲嘆の先取り行為」が生れ、患者と家族とが次第に気持ちの上で離れていってしまう。その点に十分な理解を示し、最後まで家族の絆を保って行くように宗教家は勤めなければならない。そのような取り組みを通して死を迎える苦しみを分かち合い、患者と家族を支え、その時その時に「いま」を築いて行く事が大切である。

仏教では「四苦八苦」を説いている。フロイトよりも遥か昔に、「愛別離苦」を説いている。また、キリスト教には見当らない優れた教えもある。それらを十分に踏まえ、それぞれの場において取り組んでもらいたい。

田中　雅博　先生

田中雅博先生は、国立癌センター研究員、同病院内科医師を勤められた後、現在栃木県の西明寺住職及び普門院診療所内科医師をなっさっておられる。

サイエンスとヒューマニズムの両面より、臓器移植、尊厳死、ホスピスケアにかかわる癌告知の問題などを医師として又僧侶としての立場から講演された。

**「ホスピスケアと仏教」**

サイエンスは分別智であり、正しいか間違っているかである。すなわち一義的に定義した解釈不要の言葉を用いて、反証可能な問題を扱う。

医療の問題で、反証可能な場合にはサイエンスが最も信頼できる。それは世界中の医学会において、常に批判に晒され反省を繰り返しているからである。しかし、例えば「残り少ない生命を如何に生きるか」といった問題に対しては、一人一人の答えが違っていて当然であり反証不可能であるために、サイエンスとしての医学は全く無力である。

これに対し、古典研究としてのヒューマニズムは、長い歴史の批判に晒され、選択され残った多くの古典に、「如何に生きるか、人の生き方の理想」の数々を見出すことができる。そのような古典の一つに仏教の経典がある。

**〈事例〉**

**小川晶子さんの尊厳死と臓器提供**

小川晶子さん（53才）、平成4年にすずめ蜂に刺されアナフラキーショックを起こし、車で搬送中に意識喪失及び心臓停止。蘇生術を施すが、心臓は動いたものの脳蘇生は出来なかった。救命不可能である事を家族に告げると、治療の中止と臓器提供を希望する本人のリビング・ウイルに基づいた家族の合意の申し出があり、それらは実現された。

この事実は、マスコミによって「脳死判定による治療の中止と臓器摘出」という言い方で報道されたため、殺人罪で告発を受ける。医師が一方的に脳死を判断し、治療を中止して臓器を摘出するような事は、行なわれるべきではない。プライバシーに関する権利として「救命処置の拒否を決定する権利」がある。すなわち医療提供者の「治療する義務」と患者の「拒否する権利」である。

では、本人の希望で延命治療を中断しても良いという根拠はあるだろうか。自分の死を決定するのは人それぞれであり、勿論反証不可能である。故にこの問題に関してもサイエンスは殆ど役には立たない。そこで古典（ここでは仏教経典）を参照し検討する。

初転法輪において釈尊は、四諦（四つの真理。苦諦・集諦・滅諦・道諦）について説法する。すなわち「苦」とは思いどうりにならない事を意味する。この苦しみが生まれる原因（集諦）は、愛欲、生きる欲望、死の欲望から生まれ、これらの欲望が制御された状態が滅諦である。この滅諦に至る道が道諦であり、それを実践する事を誓ったのが仏教の僧侶である。言い換えれば、生きようとする欲望からも死のうとする欲望からも自由でありたいと思う人達である。自殺を望んではいないが、生きようとする執着もないのである。これは尊厳死の立場と共通するものである。しかし、これは僧侶の場合であって、仏教はすべての人に尊厳

死を勧めるわけではない。

他者に対しては慈悲を実践するのが仏教である。

「比丘達よ　色は無常である　無常なるものは苦である　苦なるものは無我である　苦なるものは我が所有にあらず…」

仏教の理想を実践したいと願う僧侶は、身体を我が所有と執着せず、我が生命終末の時に臓器の提供を願うのである。ただこの場合も僧侶が対象であって、人々に対し一律に臓器の提供を呼びかけているのではない。

次に癌の告知について。現在、癌の治療に用いられる抗癌剤が100%有効であるとは言えない。約半数以上はただ激しい副作用におかされるだけである。こうした点において言えば、薬による治療を選択する権利が患者にはある。しかし、その選択を促すためには患者への告知が必要なのである。ここで大きな問題がある。それは日本のほとんどの病院に僧侶が居ないという事である。これは、僧侶の怠慢である。なぜならば、医学は生命の延長を問題とするのであり、如何に生きるか、「死」という思い通りにならない問題こそが、仏教の根本問題だからである。

最後に僧侶へ、壇家の方にリビング・ウィルを書いてもらう事を提案したい。それによって本人の意志に則したケアを提供すべきではないだろうか。

以上が、第22回関ブロ大会における諸先生の講演内容である。

ここでお断わりしたいのは、私が甚だ浅学を顧みず、主観的に要約したもので、本来の講演内容に不的確な点があるやも知れない。しかし、あえて私が筆を取ったのは、『浄青神奈川』の紙面を埋めるためでもなく、編集委員会の接待を期待したためでもない。今回の大会を2日間限りの単なるイベントとして終らせたくない一心からである。内容的にも我々僧侶が避けて通れない直面した問題である。同時に浄土宗の根幹である念仏の教えをこれらの問題に照らし合わせ、実際にどのように展開していくべきか、今後の取組を期待して止まない。この点を御汲み頂き不都合な点をご容赦願うと共にご指摘をたまわりたい。

いけらば念仏の　功つもり
死なば浄土へ　まいりなん
とてもかくても　此の身には
思いわずらふ　事ぞなき
と思ひぬれば　死生共に
わずらひなし

十念

# 阪神大震災
## ボランティアに参加して

ある新聞に、「ボランティア活動をしている人たちの中に、僧侶の姿が見られないのはなぜか」という記事が載っていた。「そんなことはない、僧侶だって一般のボランティアにまじってやっているんだ、他宗の僧侶が作務衣姿でしているところを見たことがある。」とその記事を読んで思われた方々もいらっしゃるのではないか。

そこで国松会長も義援金だけではなく、我々でも何かお手伝いできることがあるのではないかと思い立ったのかどうかはわからないが、例年行事として行なわれていた、「他宗団見学」を急遽取り止めて、阪神・淡路大震災ボランティアへ行くこととなった。とは言うものの長期間も活動することは不可能なので、他宗団見学の実施予定日である、三月八日～十日の三日間となった。

宿泊は、兵庫教区徳円寺様の檀信徒会館をお借りして、約一時間半をかけて、西ノ宮市役所の一般ボランティアと、灘区にある浄土宗の全壊された親王寺の仏具の搬出、整理、解体等の作業を、兵庫浄青、総本山知恩院の方々と一緒に行なった。

市役所の一般ボランティアは、ゴミの収集や、救援物資の分別等で、危険を伴う作業はしてはいけないということで、少し疑問を感じた。又、市などを通して一般人が、被害にあったお寺の解体を手伝うことはできない、ということから我々同宗の僧侶しか、その作業ができないことがわかった。

この度の大震災で被害のあった寺院は、資料によると二百五十ヶ寺以上になるわけで、まだまだお手伝いさせて頂ける作業は残っていると痛感した。

多くの神浄青会員に参加してもらったこと、OB諸大徳にもご参加頂き、又、支援金を多方面より頂戴し、ありがとうございました。

最後になりましたが、被害にあわれた諸々霊のご冥福をお祈り申しあげます。

（塩沢記）

### ボランティア参加所感

去る三月八日より十日まで神戸被災地にてボランティア活動に参加させて頂く機会を得た。

時期の問題、期間の問題があるが市役所サイドの仕事は殆どなかった。結果的になんとか同宗派の全壊寺院（親王寺）の現場で作業を補佐することとなった。このこと自体は我々の側にとっては幸であった。結果として良かったのか悪かったのかはわからない。ただ、ボランティアというのは必要とする側と必要とされる側とのバランスが大事であるので最終的に同寺院の目的には応じられなかったが、全力を挙げて当ったことに関してはそれなりのプラス効果はあったと思う。たまたま今回は浄土宗寺院救援の要請があったから行動できたが、もしこれがなかったらと考えると、我々のボランティア参加意義が揺らいでしまう。私は個人的にはボランティア活動というのは適材適所にて行うものだと感じている。我々の団体はあくまでも一宗の青年僧侶である。作務衣を被着し活動させて頂こうと思っていたところ、かえって良くないとの指摘を受け、「何故」と考え込んでしまった。問題は作務衣を着てボランティア活動できないという背景にあろう。なぜ僧侶が僧侶として活動できないのか。せっかく専門的なものであるのに残念な気がする。まあ今回は僧侶としての活動が結果的にできたので良かったのかもしれない。ボランティアというのは一時的なものではなく実は日常の影響が少なからずあると痛感した次第である。

（平元記）

あの人は今

# 壷中の天

京浜組OB　森本　祐康

毎年の施餓鬼会の随喜が楽しみな寺がある。

その寺はまるで孤島のようにビルの谷間に埋もれ、昔ながらの町並みや、互いに心の通い合うような生活は微塵も感じさせない。

しかし、その寺のいつもの仏間には、鎌倉期と思われる古仏が安置され、古伊万里や古瀬戸の花器に野の花がさり気なく生けられて、ひとときの安らぎとともに、家人の心の暖かさが伝わって来る。

茶道具や古美術品は、代々それを所持し大切に扱ってきた人々の心がそこに表れてくるものだが、特に仏像はその傾向が強い。

この仏像は何という仏様ですかと問われたある住職が、「私は仏像の専門家ではないのでわかりません」と答えたという話は例外としても、大切にされ、信仰され拝まれてきた仏像は、いつしかその心が表れてくるものである。

寺に生まれ、幼い時から古い物に囲まれて育った私にとって、そうしたものに興味を持つのはむしろ自然の事かもしれない。

この仏様はいったいいつ頃のどういう仏様だろうか、この焼物は、この絵はなどと調べていくうちに、自然と自分のまわりにそうしたものが集まってきた、というのがいまの実感であり、縁という事についてしみじみと思いをめぐらしている。

自坊に茶道教室を開設して五～六年、平成六年度からは区の生涯教育活動に参加し、年に七回の講座を開催する事になり、その一環として今年の一月には約四十五名を招いて初釜の茶会を行なう事になった。

茶道を習いはじめて数年、自信も腕前も無い身ではあるが、茶道の先生の強いすすめと、開催前の特訓により、厚かましくも亭主をつとめる事になったのは若気の至り？

今まで収集してきた道具を使ってのお手前に、茶杓を持つ手の多少の震えを覚えたが、なんとかごまかし無事終わる事ができたのは、普段の行いの良さがでたとは自画自賛もいいところか。

因みに当日の茶会記は（略）

床　勝山筆　禍福　横一行
　（阪神大震災をおもい）
花入　古銅熨斗型　花　梅　水仙
香合　交趾亀
釜　阿弥陀堂　敬典造
水指　古伊万里　染め付け
薄器　卵殻象眼鶴文棗　定治造
茶杓　小堀遠州作　銘　一会
　安田是誰筒
茶碗　李朝　魚々屋　銘　小杉
替　白楽　了入造　銘　寿
　色絵薩摩　銘　羅漢
菓子器　色絵金蘭手　大明嘉靖年製
　鼠志野刷毛目　桃山時代
　古九谷　吉田屋

マルチメディアの時代、バーチャルリアリティの時代に、仮想と現実の区別がつかなくなり、本物を見る目が失われつつある今日、今回の茶会によって本物の持つ〝何か〟を参加者全員が感じ取った様子で、実際に自分の目で見、触り、使って体験する事の大切さをつくづく思い知らされた。宗教も同じこと。

空、ものにとらわれるな、執着を断てとは仏家の教え、しかしながら未だにものにこだわるのは不徳の致すところ。

少なくとも、先祖供養を説く身であれば、代々伝わったものを大切に扱う事は当然のこと。ただ自分は次の代に無事に伝えていく事が使命と思い日々精進のみ。枕元に古信楽桧垣文うずくまる壷を置き、夜中にそれを見ながら、心なしか頬のゆるむは気が触れたか、まさに壷中の天地の心境。

そこにあるだけで心が和むというのはいいもの。自身もそうなりたいと願うがまだ先の話。

ともかくも、炭火に鉄瓶を置き、湯を沸かして茶をたてるといった、テンポのゆるい生活のリズムをつくることが今の一番の願いではある。

**編集後記**

今年は年頭より阪神大震災を始め、オウム真理教関連事件で暗い上半期でありましたが、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。私は風邪で毎月のように倒れています。（因みに今この後記を書いている時も前の日の大雨に当たりつらいです。）

小山君は私に「全部書いてネ♥」と無理矢理私がふらふらになりながら書いている状況です。早くこんな仕事を片付けて、ブルース・カーニバルやT・T・Dのライヴを見に行って気分転換でもしたいと思ってます。